

伊那西部農業開発地区内

北条・常輪寺下遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1974

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

北条遺跡

序

西春近は行政上伊那市の南部地区に位置し、大吉から小黒川、大田切川、藤沢川等の河川、あるいは源を諏訪湖に求める天竜川との河岸段丘上に発達した地区であります。このような自然環境に恵まれたために、いにしえの昔より、人間の生活の舞台となった場所（いわゆる遺跡）が現在確認されたので80数ヶ所にわたって存在しています。このような祖先が残してくれた貴重な文化財が近年急速な社会変化により生じた開発の波のために破壊され、失なわれていくことは誠に残念であります。我々は埋れた先人の文化を知り、また、それとともに大切に保存し、後世に伝達することは大きな責務であります。

今度、北条、常輪寺下両遺跡は大規模農道路線内に該当し、工事着手以前に発掘調査を義務づけられています。

北条遺跡の発掘成果は土塙4、配石1、常輪寺下遺跡は住居址7、土塙7、柱穴群1等の成果を収めました。

報告書の刊行にあたっては、この発掘調査の実施に深い御理解と御指導を下さった南信土地改良事務所職員一同、適切な判断、処置をして下さった友野良一団長を始めとする調査団の各位に深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和49年3月30日

伊那市教育委員会

教育長 松 沢 一 美

まえがき・北条・常輪寺下遺跡の環境

第1節 位 置

北条遺跡は長野県伊那市西春近山本に所在する。常輪寺下遺跡はその南方500m程の位置にあって、山本。城両部落にまたがって広がっている。両遺跡を交通の便から考えてみると、飯田線下島駅で下車して、段丘を登り、北西へ2km程で目的地に至る。

遺跡の名称

1 城平上	40 鹿木原
2 城平	41 鹿木古墳
3 常輪寺社	42 北丘B
4 宮林	43 北丘A
5 山の根	44 北丘C
6 山本	45 南丘B
7 常輪寺下	46 南丘A
8 上村	47 南丘C
9 北条	48 鶴田原
10 上島下	49 山の神
11 上島	50 上の坂
12 東方B	51 芝原南原
13 東方A	52 下小出原
14 村岡北	53 天伯原
15 村岡南	54 村田泊
16 大塙	55 東原
17 中	56 天井原
18 百枚刈外	57 小出原
19 西塙外A	58 久保原
20 織ケ谷A	59 妻木原
21 織ケ谷B	60 山の下
22 小出城	61 萩原
23 宮ノ原	62 富士山下
24 浜射場	63 富士原
25 中	64 広畠外1
26 中村東	65 広畠外2
27 山寺坂外	66 井田高
28 白沢原	67 高退進南
29 名	68 西春近山
30 名瀬西古墳	69 安岡城
31 名瀬東古墳	70 城の裏
32 名瀬南	71 吹平
33 聖天原	72 和
34 聖天原	73 上平
35 聖天原	74 南口
36 (カシバ)山	75 寺
37 丸	76 下牧
38 南小出南原	77 下牧經原
39 荒跡堂	



第1図 位置及び遺跡分布図

第2節 地形・地質

木曾山脈（中央アルプス）、赤石山脈（南アルプス）、伊那山脈はともに南北に継走し、前述した諸山脈との間を諏訪湖に源を発する天竜川が諸山脈より流出する幾多の支流を集め、水量を増加させながら、太平洋へと南下している。天竜川の右岸（竜西）、左岸（竜東）には複合扇状地や数段より成る河岸段丘が形成され、美事な自然景観を展開している。複合扇状地や河岸段丘の基盤となるものは、諸山脈より流出した砂礫層であり、その上に乗駒、御岳の火山灰土をのせ伊那盆地が広がっている。伊那盆地のうち、伊那市附近が、東西の幅が広く、伊那市西春近表木部落辺が狭く、東西の幅2.5km、更に駒ヶ根市付近では8km程ある。駒ヶ根市より飯島町に至ると、複雑化し、比高も高くなっている。要するに本流と大小河川のはげしい浸蝕作用を物語っている。

本遺跡の所在する附近の地形をやや詳細に述べてみると、木曾山脈の主要な登山道の玄関口である桂小場に源を発する小黒川と、同じく中央アルプスの前山と考えられる権現山とに挟まれた河成段丘と山麓扇状地に混在したいわゆる複合扇状地上にある。

西春近全域にわたって、西山より発し、天竜川と合流する河川は南より藤沢川、猪の沢川、犬田切川、琴沢川、戸沢川、小黒川等の名があげられる。以上述べた川は主なるもので、小河川を含めると相当量にのぼる。

気象現象は上段の扇状地は風雨が強く、下段はおだやかな気象現象を示す。西春近諏訪形地区は大田切川の影響をうけている。犬田切川の扇状地形面に所在する木裏原、白沢、戸沢川やその支流によった山麓地帯は上部からの流動による土砂や転石が数多く見受けられた。特に戸沢川を中心とする細ヶ谷、宮の原周辺には、珍らしくホルンヘルスの自然石がるるいとしていた。

第3節 歴史的環境

両遺跡（北条、常輪寺下遺跡）の所在する伊那市西春近山本地区は奈良時代から平安時代に至る東山道の道順として、また鎌倉時代には常輪寺創建に伴なう大房丸伝説等で有名な地である。常輪寺、大房丸伝説については伊那市寺院誌によれば次のように記されている。

『常輪寺創立の記源は源頼朝の幕臣、伊豆の大守で七島を領した工藤祐経の洞巖大房丸が開基である。大房丸は小数の重臣をひき連れて、伊那市孤島へ流されたが、後に小出に居城を構へた幼少であったために幕府から養育費として、孤島、大島、殿島、青島、牧島、福島、小出島の七島を賜わり、近隣一帯の開田を振興させた。当時、小出東形の地に大通院と称した古寺があつてこれを再建し大通院常輪寺と名づけて、これに守本尊の華嚴釈迦如来を安置し、開基となつた。

建仁2年(1202)8月に鎌倉から弁宗神師を招いて常輪寺開山としたのであるが神師が遷化した後、更に鎌倉から弁明神師を招いて第2代とし自らも仏門に入ったのである。この事が鎌倉の知るところとなり右大将より流刑が許されて、大和守に任せられ工藤祐時と称した。越えて貞応元年(1222)6月26日祐時は卒した。大通院殿覺翁常輪大居士と謹号を受け山麓に塚を築いて葬む

られた。その後、常輪寺は小出耕地北寺地（塚の北隣）へ移築造営が行なわれ、この地に暫く一世代を過した。かくして始祖弁宗禪師から十数代を経て後、後嗣の法系が絶えるに至り文禄元年（1592）3月常輪寺5世造天弘宅大和尚が中興開山となって新たに寺地を現位置に移し、堂塔伽藍建造の大事業を敢行して、宗旨も曹洞に轉宗し、山号を轉法山と改めた。」

山本部落の南側に城部落がある。部落の名からして、誠に浮んでくるのは、小出氏の居城と推定される小出城のことである。この城は現在、自然地形を利用した外堀、本城を取り囲む内堀あるいは土壘等築城当時をしのばせる城郭遺構が残存している。

以上、前書はこのくらいにして、西春近地区全破にわたる遺跡について述べてみよう。前節の地形、地質で述べた如く、遺跡は概して、山麓扇状地の扇頂、扇側部、あるいは扇端部（この位置は天竜川第一段丘面と合致する）、天竜川の支流で西から東へ流れる藤沢川、猪の沢川、犬田切川、琴沢川、戸沢川、小黒川の左右段丘面に密集している。現在、伊那市西春近地区に発見されている遺跡は80カ所を数える。80カ所の遺跡中の内訳は旧石器を出すもの3カ所、その場所は上島下、南丘A、菖蒲沢遺跡である。

縄文早期は9カ所で、その場所は山の根、大境、百駄刈、細ヶ谷B、名廻、名廻南、北丘B、菖蒲沢、下牧遺跡である。

縄文前期は7カ所で、その場所は山の根、上島下、上島、百駄刈、細ヶ谷B、名廻南、唐木原遺跡である。

縄文中期は62カ所で、全遺跡数の8割を占めているので、遺跡名は今回省略させてもらうことにする。

縄文後期は13カ所で、その場所は城平、山の根、山本、東方A、大境、中原、百駄刈、細ヶ谷B、小出城、北丘B、天伯、井の久保、菖蒲沢遺跡である。

縄文晩期は6カ所で、その場所は城平、山の根、大境、百駄刈、細ヶ谷B、菖蒲沢遺跡である。

弥生時代は縄年上、前期、中期、後期の三時期に分類されているが、西春近地区は全て弥生時代後期であり、その数は11カ所を数える。その場所は山の根、山本、上村、南丘A、富士山下、安岡城、城の腰、横吹、和手、上手南、東方A遺跡である。

須恵器を出すもの34、灰陶陶器を出すもの26

中世土器または陶磁器を出すもの11で、その場所は城平上、城平、山の根、東方A、大境、百駄刈、小出城、山寺垣外、薬師堂、安岡城、和手遺跡である。

（小池政美）

凡　例

1. 今回の調査は昨年度実施された西美輪地区大萱遺跡緊急発掘調査に続くもので、南春近地区、北条・常輪寺下遺跡報告書とする。
2. この調査は大規模農道事業に伴う緊急発掘で、事業は南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は48年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡単にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。
4. 本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明白にした。

○本文執筆者　　友野良一，小池政美

○図版作製者

　・遺構及び地形実測図　　友野良一，小池政美

○写真撮影

　・発掘及び遺構　　友野良一，小池政美

　・遺物　　友野良一，小池政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

目 次

序

凡 例	(4)
目 次	(5)
挿図目次	(6)
図表目次	(6)
図版目次	(6)
第Ⅰ章 発掘調査の経過	(7~9)
第1節 発掘調査の経緯	(7)
第2節 調査の組織	(7)
第3節 発掘日誌	(8)
第Ⅱ章 遺 構	(10~12)
第1節 土 拡	(10)
第2節 配 石	(12)
第Ⅲ章 遺 物	(13~14)
第1節 土 器	(13)
第2節 石 器	(14)
第Ⅳ章 まとめ	(14)

挿図目次

第1図 位置及び遺跡分布図	(1)
第2図 遺構配置図	(10)
第3図 土括実測図 （左上第1号 左下第3号） （右上第2号 右下第4号）	(11)
第4図 第1号配石実測図	(12)

図表目次

第1表 出土土器の形状一覧表	(13)
第2表 出土石器の形状一覧表	(14)

図版目次

図版1 遺跡遠景（南側より望む）	(15)
図版2 遺跡近景（東側より望む）	(15)
図版3 遺跡全景	(16)
図版4 土括（右第1号、中第2号、左第3号）	(16)
図版5 第4号土括	(16)
図版6 第1号配石	(16)
図版7 土層断面	(17)
図版8 土器出土状況	(17)
図版9 土器出土状況	(17)
図版10 石鐵出土状況	(17)
図版11 水車小屋	(17)
図版12 出土土器	(18)
図版13 出土石器	(18)

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

大規模農道は西部開発事業の一環として、伊那市西春近から辰野町に至る農道であり、路線はおうよそ中央道に沿って設定されている。ルートは小黒川より以北は中央道より上に、以南はそれより下に予定されている。伊那市西春近地区に於ても、昭和48年度には北条遺跡が該当し、工事開始以前に発掘調査をして記録保存をする措置が行じられ、南信地区改良事務所より、伊那市教育委員会へ委託をして行なわれた。

昭和48年2月3日 教育委員会より保坂課長補佐、調査団側から、根津、辰野、小池、南信土地改良事務所田中主幹の出席のもとに、現地協議を行ない、予算額を算出する。

昭和48年2月5日 教育委員会より要求予算額を南信土地改良事務所へ提出する。

昭和48年6月5日 北条遺跡を含めた大規模農道の埋蔵文化財について南信土地改良事務所より教育委員会へ照会がある。

昭和48年6月12日 照会についての回答を南信土地改良事務所へ提出する。

昭和48年8月22日 埋蔵文化財の発掘調査計画書の件について教育委員会へ照会があった。

*昭和48年9月20日 発掘調査計画書と発掘調査予算書を提出する。

昭和48年10月19日 北条遺跡委託契約の通知がある。

昭和48年10月22日 発掘届を文化庁長官へ提出する。当初では発掘調査を11月5日～11月15日までと決める。

昭和48年10月25日 地元との交渉が難行し、発掘調査の予定はたたず。

昭和48年11月14日 文化庁長官へ発掘延期届を提出する。発掘調査を11月下旬と決める。

昭和48年11月24日 11月下旬になっても、地元との折衝が難行し、再度、発掘延期届を提出する。また気候的な条件からして、発掘調査を翌年の3月と決める。

昭和48年3月11日 再発掘届を文化庁長官へ提出する。

昭和48年3月13日 南信土地改良事務所長と伊那市長と北条遺跡について65,000円にて契約を締結する。

第2節 調査の組織

北条遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長 松沢一美 伊那市教育委員会教育長

副委員長 福井綱一郎 伊那市文化財審議委員会委員長

委員 坂井喜夫 伊那市教育委員長

委 員	向山雅重	長野県文化財専門委員
・	木下 衛	上伊那教育会会长
・	岡田謙一	南信土地改良事務所長
・	辰野伝斯	伊那市文化財審議委員
調査事務局	浦野孝之	伊那市教育委員会社会教育課長
・	保坂九市	課長補佐
・	小池政美	書記
発掘調査団		
團 長	友野良一	日本考古学协会会员
調 査 団	根津清志	長野県考古学会会员
・	御子柴泰正	・
・	福沢幸一	・
・	辰野伝斯	伊那市文化財審議委員
・	小池政美	長野県考古学会会员

第3節 発掘日誌

昭和49年3月14日 旧地主との折衝、地層の調査、器材の運搬

昭和49年3月15日 地層の調査、グリット設定を行なう。その内容は次の通りである。南北に流れる川を境にして、東側をD地区、西側は手前よりA地区、B地区、C地区とする。D地区は南から北へ(A~I)、東から西へ(1~5)、A地区は(A~I)、(1~10)、B地区は(A~H)、(1~8)、C地区は(A~F)、(1~5)とする。各々のグリットは2m×2m面積4m²のものを原則としているが、道路の幅の大小によって、両端は規格に満たないものもできただが、一応一グリットとして考えた。D地区の12グリットを調査した結果、水路の氾濫による堆積土が多く、仕方なしに調査を断念しなければならない事態となつた。

昭和49年3月16日 A地区のグリット掘り下げを実施する。AG 7より石を集めた土壠を検出し、これを第一号土壠とする。AF 7～AG 7に第2号土壠、AF 7に第3号土壠を発見した。

第3号土壠より底部の土器が正位で出土した。AF 6、AD 5より地場層面から石鏡が2点出土した。明らかに開田時にいすこより移動してきたのだと思われる。AA 9～AH ラインはローム層まで表土面より30cm程を測定できる。

昭和49年3月17日 Bグリットを掘り下げてみた。遺物は相当量出土しているが、遺構らしきものは確認できず、AA 1、AA 2 ラインはローム



発掘風景 (A地区)

層まで深くて凡そ 1m もある。

昭和49年3月18日 第1～第3号土壠の東側全体を掘り下げる、AG5に土壠がみられ、第4号土壠と命名する。第4号土壠の東側に落ち込みがみられ、拡張してみると、これは自然傾斜による埋没であると 判断できた。

A E 3 の褐色土下層からローム層にかけて石が並べてあり、第1号配石とする。

昭和49年3月19日 第1～第4号土壠、第1号配石の掘り下げ、並びに完掘を終える。

B地区、C地区でそれぞれグリット掘りを実施してみると、遺物はわずかに数片が出土したのみで遺構の存在性は全く無いと考えてもよからう。

昭和49年3月20日 昨日、完掘を終えた遺構の写真撮影をする。

第1号～第4号土壠、第1号配石の平面実測をする。

昭和49年3月21日 第1号～第4号土壠、第1

号配石の断面実測をする。第1号～第3号土壠、第1号配石の石を排除した後の写真撮影をする。

昭和49年3月22日 発掘器材の運搬をする。

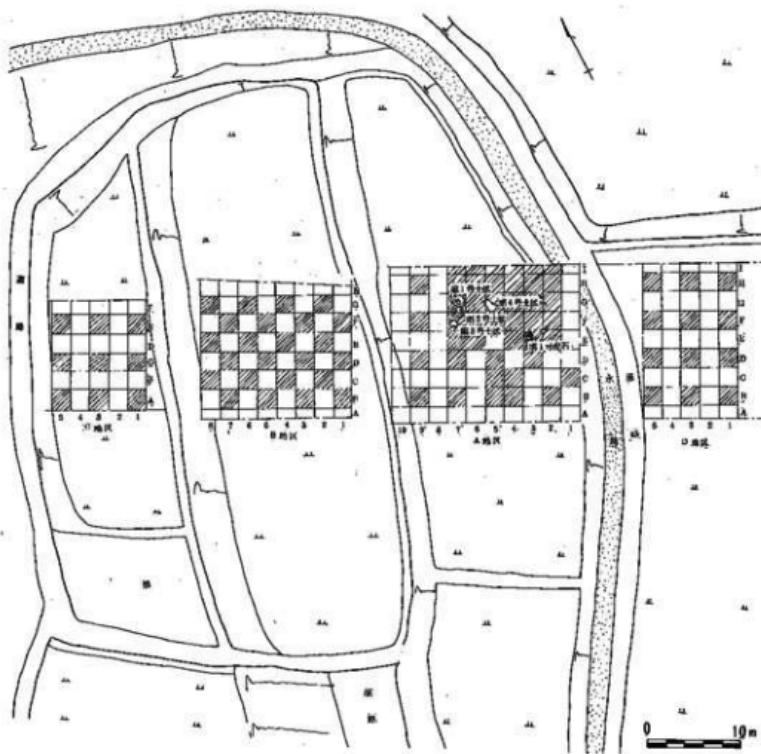


発掘風景（C地区）

（小池政美）

第Ⅱ章 遺構

第1節 土 坂

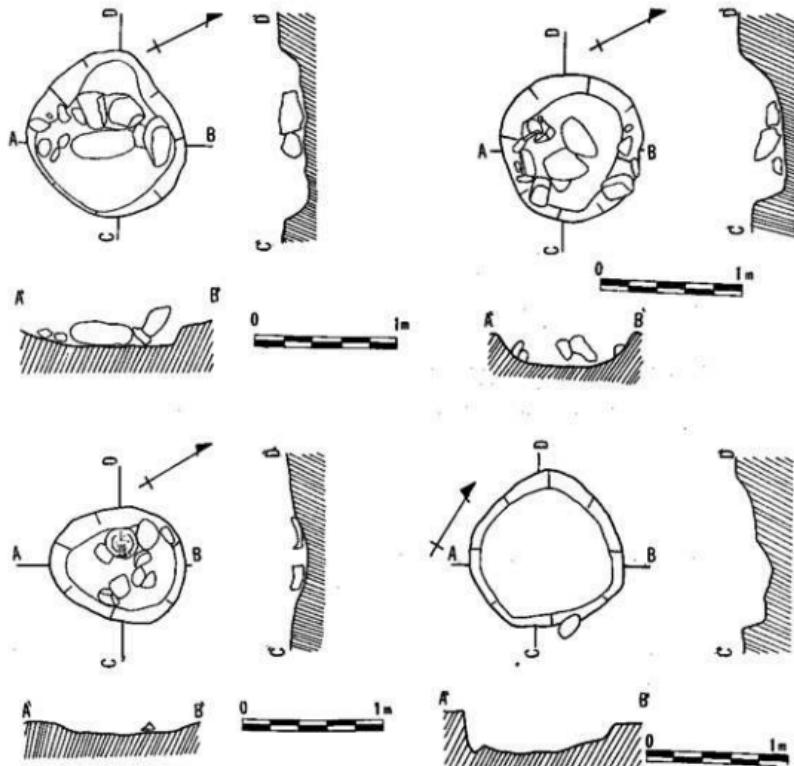


第2図 遺構配置図

第1号土塹(第3図、図版4)

ローム層を掘り込み、南北1m10cm、東西1m20cm程の規模を存し、楕円形プランを呈する土塹である。壁は10~15cmを測り、東壁は垂直で、他はなだらかである。床面はわずかに叩きになっており、また床面上に密着、あるいはわずかに浮いて花崗岩や変成岩の自然石が置かれ、その周囲より焼土と炭化物が検出された。

遺物は土器片が数片出土し、それによると勝坂Ⅱ式から加曾利E 1式と思われる。



第3図 土塹実測図（左上第1号・右上第2号・左下第3号・右下第4号）

第2号土塹(第3図、図版4)

ローム層を掘り込んで構築された土塹で、その規模は南北1m、東西1m5cmである。プランは円形を呈している。壁高は低い所で16cm、高い所で23cm程を測定できる。壁面状態は内傾気味である。床面はわずかに叩きになっており、それに密接、あるいは数cm浮いて数個の花崗岩や変成岩が意図的に置いてあった。覆土内より遺物は全く出土しなかったが微量の炭化物を検出した時期は土塹の配列からして、第1号土塹、第3号土塹と同期と考えてよからう。

第3号土塹(第3図、図版4)

ローム層を掘り込み、南北95cm、東西80cmの規模を持ち、平面プランは精円形である。壁高は数cm位を計え、その為に軟弱である。床面は叩きは認められずに、ローム層そのままで、軟かくなっていた。床面上の石は拳大から人頭大程の変成岩や花崗岩を並べてあり、西壁に密着して土

器の底部が正位になっており、周囲は石をならべて移動しないようにしてあった。時期は勝坂式の新しい方に属していると思われる。

第4号土塹(第3図、図版5)

表土面より70cm位下ったローム層面を掘り込み、南北1m×10cm、東西1m×10cm程の規模を有する土塹で、円形プランを呈している。壁高は南西から北東へ傾斜している為に、前者は高く、後者は低くなっている。状態は南、西壁は垂直、北、東壁は内傾気味であった。

床面は叩きらしきものはなかったが、覆土中より少暈の焼土と炭化物が検出された。

遺物は全く検出されなかった。

(小池政美)

第2節 配 石

第1号配石(第4図、図版6)

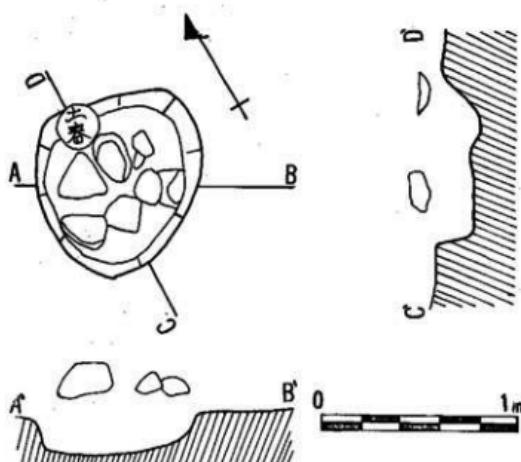
表土面より大体1m位下のローム層面に配石が検出された。その規模は南北50cm、東西65cmに亘り人頭大程の花崗岩や変成岩を8個並べ、配石となしている。配列は南に4個、北側に4個、それぞれ大体直線上に置き、それらに囲まれた中間部は無石部である。

配石を取り除くと、
下に黒土層が充満して
おり、掘り下げていく
と、規模が南北30cm、
東西85cm、深さ20cm程
度の土塹となった。

壁の状態は内傾気味
で、人為的な叩きは認められず、床面は多少
の起伏があり、叩きは
壁同様に認められなか
った。

覆土中より多量の炭
化物と焼土が検出され
た。

遺物は北壁に密着し
配石レベルよりわずかに下って、加曾利E式の古い土器が出土した。



第4図 第1号配石実測図

(小池政美)

第Ⅱ章 遺物

第1節 土器

土器の説明は表を作製し、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を付記しておくこととする。

胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかなる基準によったものではなく、筆者の主觀によるものである。
 (小池政美)

図版	番号	胎土	保存状態	色調	厚さ(mm)	文様の特徴	備考
12	1	長石を少量	良	白灰色	7	粘土紐と沈線	第1号土 押
"	2	"	"	"	8	"	"
"	3	"	"	"	"	"	"
"	4	長石を多量	"	黒褐色	7	粘土紐、沈線、繩文	"
"	5	"	"	白灰色	8	粘土紐と沈線	第3号土 押
"	6	"	"	黒褐色	"	"	第1号配石
"	7	"	不良	薄茶色	10	"	"
"	8	"	"	黒褐色	13	"	"
"	9	"	普通	薄茶色	9	粘土紐と刺突文	"
"	10	雲母を少量	"	茶褐色	10	沈線	"
"	11	"	"	"	10	粘土紐と沈線	"
"	12	雲母を多量	"	黒褐色	7	沈線と繩文	"
"	13	"	"	茶褐色	8	沈線、繩文、刻目	"
"	14	雲母を少量	"	"	6	沈線	"
"	15	"	不良	黒褐色	6	沈線	"
"	16	雲母を多量	良好	"	7	繩文と沈線	"
"	17	"	普通	茶褐色	"	連続爪形文	"
"	18	"	良好	黒褐色	"	"	"
"	19	"	"	赤褐色	4	粘土紐	"
"	20	"	普通	"	8	繩文	"
"	21	"	"	"	"	"	"
"	22	"	"	黒褐色	9	繩文と沈線	"
"	23	長石を少量	不良	黄褐色	6	粘土紐	"

第1表 出土土器の形状一覧表

第2節 石 器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石質、備考である。
 (小池政美)

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
13	1	打製石斧	短冊形	硬砂岩	
*	2	*	*	*	
*	3	*	*	砂 岩	
*	4	*	*	緑泥岩	
*	5	*	*	硬砂岩	
*	6	*	盤 形	砂 岩	
*	7	*	短冊形	緑泥岩	
*	8	石 鐵	二等辺三角形	赤チャート	
*	9	*	三角形	青チャート	片脚の先端部欠損

第2表 出土石器の形状一覧表

第Ⅳ章 ま と め

北条遺跡では、なにしろ12m幅と限られた用地、以前の開田による遺跡破壊等、いくつかの遺構条件が重なってしまって、期待していたほどの成果を得ずに終了じってしまった。わずかに遺構と考えられるものは、縄文中期時代の土括4、同時代の配石1を確認し、またそれに関連する遺物を収集した。遺構の名称をつけた第1号土括、第2号土括、第3号土括は、凡そ直線状に並びまた大きさ、深さはともに極だった差はないようと思われる。3基の土括の共通点としては、内部に全て、花崗岩や変成岩の自然石を置いてあり、しかも石は大体底部に密着あるいは、それに近い面に存在していた。花崗岩は小黒川、変成岩は権現山山麓に産している。

遺構の周辺には自然石らしきものは全く検出されなかった。したがって土括内の石は人為的に運搬され、置いた事が実証できよう。第3号土括の興味深い問題としては土器の底部を正位にかつまたその回りに石を置いて移動しないように措置してあった。第1号配石は配石自体は普通に見られるとの差はないが、石の下に黒土が充満し、土括状になっていた。したがって遺構の名称の件であるが、配石にするか、集石にするか、石を伴なう土括にするかは今後の研究課題の一つとなるであろう。今回は一応、配石として取り扱ったことを附記しておきたい。（小池政美）



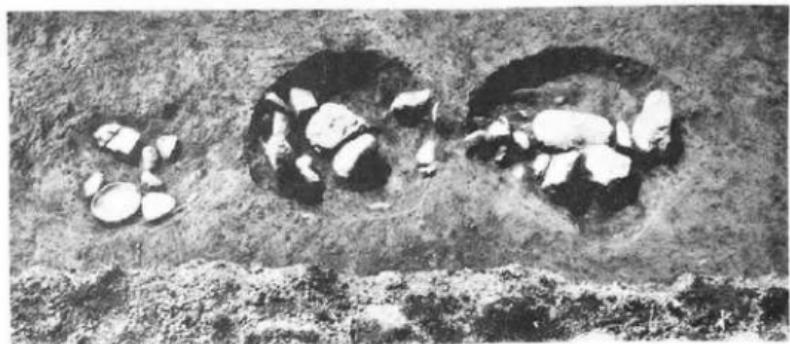
図版1　遺跡遠景（南側より望む）



図版2　遺跡近景（東側より望む）



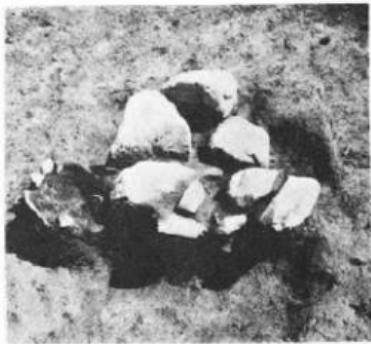
図版3 遺構全景



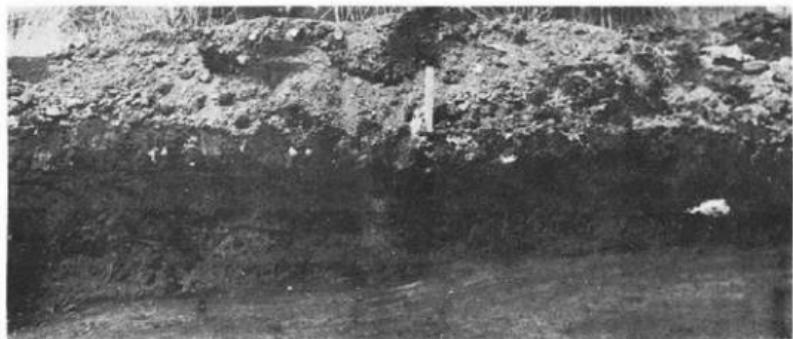
図版4 土抜 (右第1号, 中第2号, 左第3号)



図版5 第4号土抜



図版6 第1号配石



圖版 7 土層斷面



圖版 8 土器出土狀況



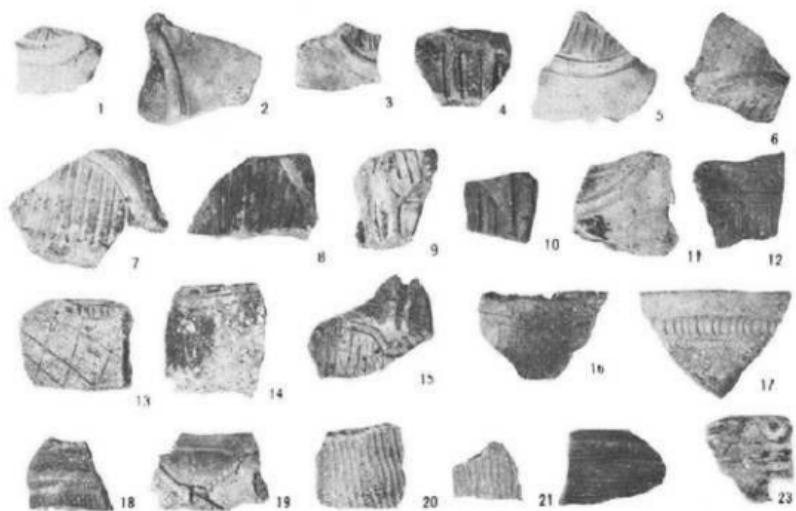
圖版 9 土器出土狀況



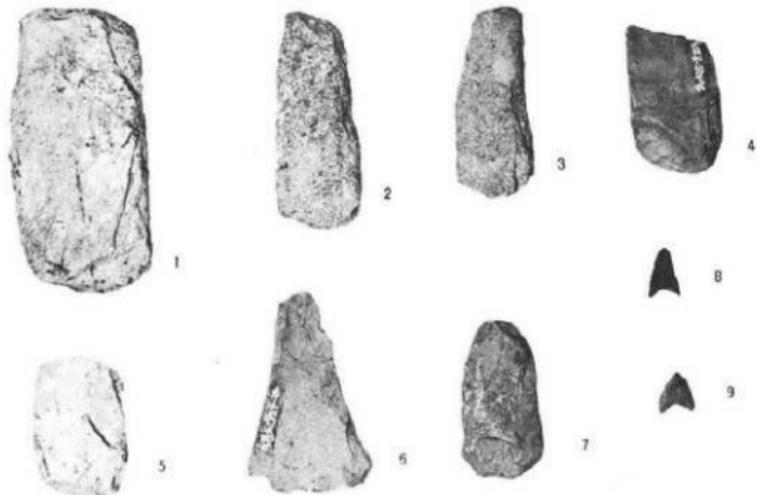
圖版 10 石器出土狀況



圖版 11 水車小屋



圖版12 出土土器



圖版13 出土石器

常輪寺下遺跡

常輪寺下遺跡

目 次

目 次	(3)
挿図目次	(4)
図表目次	(4)
図版目次	(4)
第Ⅰ章 発掘調査の経過	(5 ~ 7)
第1節 発掘調査の経過	(5)
第2節 調査の組織	(5 ~ 6)
第3節 発掘日誌	(6 ~ 7)
第Ⅱ章 遺 構	(8 ~ 17)
第1節 住居址	(8 ~ 14)
第2節 土 坂	(14 ~ 16)
第3節 柱穴群	(17)
第Ⅲ章 遺 物	(18 ~ 21)
第1節 土 器	(18 ~ 20)
第2節 陶 器	(20 ~ 21)
第3節 石 器	(21)
第Ⅳ章 ま と め	(22)

挿図目次

第1図 遺構配置図	(8)	第6図 第6号住居址, 第7号土塙実測図(13)
第2図 第1号住居址, 第2号土塙実測図	(9)	第7図 第7号住居址実測図 (14)
第3図 第2号住居址実測図	(9)	第8図 土塙実測図(左上第1号, 右上第3号, 左下第4号, 右下第5号)(15)
第4図 第3, 第4号住居址実測図	(10)	
第5図 第5号住居址, 第6号土塙実測図	(12)	第9図 柱穴群実測図 (17)

図表目次

第1表 出土土器の形状一覧表(その1)	(18)	第6表 出土土器の形状一覧表(その6) (20)
第2表 出土土器の形状一覧表(その2)	(18)	第7表 出土土器の形状一覧表(その7) (20)
第3表 出土土器の形状一覧表(その3)	(19)	第8表 出土陶器の形状一覧表(その1) (21)
第4表 出土土器の形状一覧表(その4)	(19)	第9表 出土石器の形状一覧表(その1) (21)
第5表 出土土器の形状一覧表(その5)	(19)	第10表 出土土器の形状一覧表(その2) (21)

図版目次

図版1 遺跡遠景(南側より望む)	(24)	図版18 柱穴群 (29)
図版2 遺跡近景(西側より望む)	(24)	図版19 須恵器出土状況(第1号住居址) (30)
図版3 遺構全景	(25)	図版20 土塙出土状況(第3号住居址) (30)
図版4 第1号住居址	(25)	図版21 土塙出土状況(第3号住居址) (30)
図版5 第2号住居址	(26)	図版22 土塙出土状況(第5号住居址) (30)
図版6 第3, 4号住居址	(26)	図版23 土器出土状況(第6号住居址) (30)
図版7 第5号住居址	(27)	図版24 土塙出土状況(第7号土塙) (30)
図版8 第6号住居址, 第7号土塙	(27)	図版25 出土土器 (31)
図版9 第7号住居址	(28)	図版26 出土土器 (31)
図版10 第5号住居址伊址	(28)	図版27 出土土器 (32)
図版11 第6号住居址伊址	(28)	図版28 出土土器 (32)
図版12 第1号土塙	(28)	図版29 出土土器 (33)
図版13 第2号土塙	(28)	図版30 出土土器 (33)
図版14 第3号土塙	(29)	図版31 出土土器 (34)
図版15 第4号土塙	(29)	図版32 出土陶器 (34)
図版16 第5号土塙	(29)	図版33 出土石器 (35)
図版17 第6号土塙	(29)	図版34 出土石器 (35)

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

大規模農道は西部開発事業の一環として、伊那市西春近から辰野町に至る農道であり、路線はおおよそ中央道に沿って設定されている。ルートは小黒川より以北は中央道より上に、以南はそれより下に予定されている。伊那市西春近地区に於ても、昭和48年度には常輪寺下遺跡が該当し工事開始以前に発掘調査をして記録保存をする措置が行じられ、南信土地改良事務所より、伊那市教育委員会へ委託をして行なわれた。

昭和48年2月2日 教育委員会より保坂課長補佐、調査団側から、根津、辰野、小池、南信土地改良事務所田中主幹の出席のもとに、現地協議を行ない、予算額を算出する。

昭和48年2月5日 教育委員会より要求予算額を南信土地改良事務所へ提出する。

昭和48年6月5日 常輪寺下遺跡を含めた大規模農道の埋蔵文化財について南信土地改良事務所より教育委員会へ照会がある。

昭和48年6月12日 照会についての回答を南信土地改良事務所へ提出する。

昭和49年1月1日 埋蔵文化財の発掘調査計画書の件について伊那市教育委員会へ照会がある。

昭和49年1月24日 発掘調査計画書と発掘調査予算書を提出する。

昭和49年1月30日 常輪寺下遺跡の委託契約の通知がある。

昭和49年3月11日 文化庁長官宛で発掘届を提出する。

昭和49年3月13日 南信土地改良事務所長と伊那市長と常輪寺下遺跡について670,000円にて契約を締結する。

第2節 調査の組織

常輪寺下遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長 松沢一美 伊那市教育委員会教育長

副委員長 福澤忠一郎 伊那市文化財審議委員会委員長

委員 坂井喜夫 伊那市教育委員長

向山雅重 長野県文化財専門委員

木下 衛 上伊那教育会会长

岡田謙一 南信土地改良事務所長

辰野伝衛 伊那市文化財審議委員

調査事務局 浦野孝之 伊那市教育委員会社会教育課長

保坂九市 課長補佐

調査事務局 小池政美 伊那市教育委員会社会教育課書記

発掘調査団

団長 友野良一 日本考古学协会会员

調査団 梶津清志 長野県考古学会会员

* 御子柴泰正 *

* 福沢幸一 *

* 辰野伝斎 伊那市文化財審議委員

* 小池政美 長野県考古学会会员

第3節 発掘日誌

昭和49年3月23日 グリットを設定する。南から北にかけて1~26、東から西にかけてA~Fとする。テントの設定、午後より発掘を開始し、15グリットほどを掘り下げる。A3より褐色土の落ち込みがみられ、これを第1号土塗とし、掘り下げてみると縄文中期のものと思われた。

第1号土塗の西側、北側に角や円の柱穴がみられ、柱穴群とする。

和49年3月24日 柱穴群の範囲を調査するためにグリットの拡張をこころみる。A11に落ち込みがあり、第2号土塗とし、掘り下げを開始した。中より縄文中期土器片が出土した。柱穴群はC11ラインまで延びており、この周辺より鎌倉期から桃山期に至る陶器片が出土し、ある程度時代の決定が判然とした。

A13に黒土の落ち込みがあり、第1号住居址とする。

昭和49年3月25日 昨日につづきB1号住居址周辺のグリット拡張に重きをおくと同時に、グリットを掘りすすめると、A18、B16、C14にそれぞれ落ち込みがあり、前から第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址とし、それらのプラン確認に努める。3つの住居址より縄文中期土器片が相当量出土した。

昭和49年3月26日 第1号住居址の掘り下げを実施する。床面まで掘り下げると、西側の近くに須恵器の杯が出土した。カマドが当然ある時期と判断して調査を進めるが、どうも用地外にあるとみて、姿をあらわさずに終了。誠に残念であった。第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址のプランがつかめたので、掘り下げをする。第2号住居址の大部分は用地外なので、部屋は検出できなかった。第3号住居址、第4号住居址は切り合い関係になっており、その様相は第3号住居址は第4号住居址に切られている。A19に黒土の落ち込みあり、第3号土塗とする。



発掘風景

第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址を完掘する。3軒の住居址には全て周溝がみられた。
第3号住居址、第4号住居址の床面より、ほぼ完型に近い土器が出土し、時代決定が可能となつた。第3号土壙の掘り下げ、並びに完掘を終了する。

グリット拡張を北側へ延長していくと、いくつもの落ち込みがあり、第4号土壙、第5号土壙、第6号土壙、第7号土壙、第5号住居址、第6号住居址と命名し、その全ぼう確認に努める。

昭和49年3月27日 第5号住居址、第6号住居址のプラン確認に集中し、それがつかめた時点で掘り下げを開始する。住居址のプラン確認と同時に土壙のプラン確認を進める。第7号土壙より繩文晩期の土器片が出土した。

昭和49年3月28日 第4号土壙、第5号土壙、第6号土壙、第7号土壙の掘り下げ、並びに完掘をすませる。A23に落ち込みがあり、これを第7号住居址とし、掘り下げ完掘をすませた。

第6号住居址の北西のピット内より底部穿孔の伏甕、第7号住居址より石蓋付の埋甕が出土した
柱穴群の掘り下げと、B3～B4を拡張すると、ピットがあり、B3のピット内より多量の鉄
錘と吹子が出土し、鍛冶屋があったように思われる。

いままで検出された遺構、第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址、第1号土壙、第2号土壙、第3号土壙、第4号土壙、第5号土壙、第6号土壙、第7号土壙、柱穴群の写真撮影を終える。

昭和49年3月29日 第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址の実測をする。

昭和49年3月30日 第1号土壙、第2号土壙、第3号土壙、第4号土壙、第5号土壙、第6号土壙、第7号土壙、柱穴群の実測をする。発掘器材の後かたづけをする。本日をもって一応、発掘調査を終了する。

（小池政美）

第Ⅱ章 遺構

第1節 住居址

第1号住居址（第2図、図版4）

本址は調査地区の中央よりやや北側によつた用地内の東端に発見された竪穴住居址である。住居址の大きさは南北4m85cm、東西は用地外の為に不明であるが、プランは隅丸方型を呈している。床面は全般的に平坦であるが、中央よりやや西に寄つた面は凹凸が著しい。床面上の石は花崗岩やホルンヘルスが主であった。

周壁は北部で20cm、南部で16cm、西部で12cm程度褐色土層面に掘り込まれていた。また周壁に沿つて、北側から西側をまわり、南側にかけて周溝が存在し、その幅は10cm、深さは数cmであった。

柱穴は住居址の全貌が不明の為に、確実なものを把握できなかつたが、柱穴となりそなのはP₁、P₂、P₃、P₄である。出土遺物は須恵器の杯、土師器である。したがつて本址は奈良時代と決められる。同時代の住居址はカマドの存在が当然であるが、本址のカマドは用地外にあると思われる。カマドの形態が明瞭であれば、なお一層確実な時代決定が可能である。（小池政美）

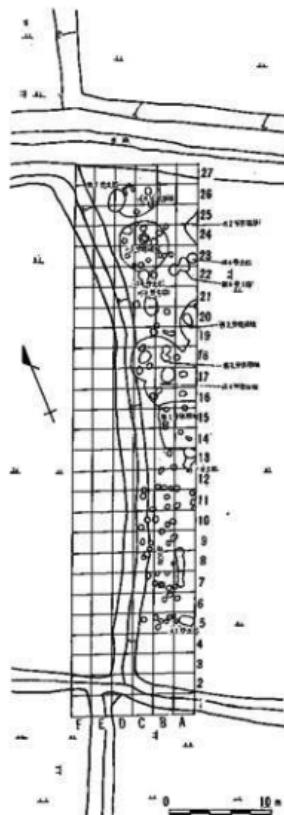
第2号住居址（第3図、図版5）

本址はローム層を掘り込み、南北4m50cm、東西は用地外のために不明である。プランは推定するに円形と思われる。壁高はさまざまであるが、10cmから40cmの範囲に含まれる。壁面の状態は全般的に垂直に近い。

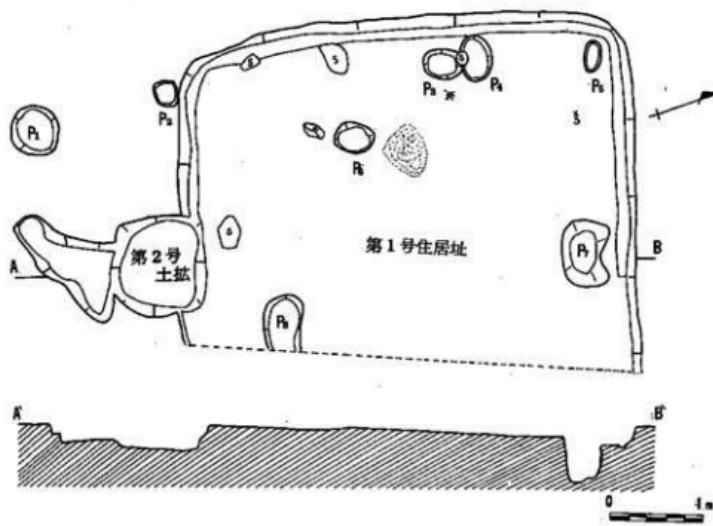
床面のローム層のわずかな叩きで、床としては普通である。戸は用地外にあると思われる。周溝は壁面直下にローム層を10cm掘り込んでつくられ、幅は10~20cmである。

柱穴は大きさ、深さ、位置からして、P₁、P₂が該当するものと思われる。柱穴の配列は全面発掘が不可能により想像するのが極めて困難な状態である。

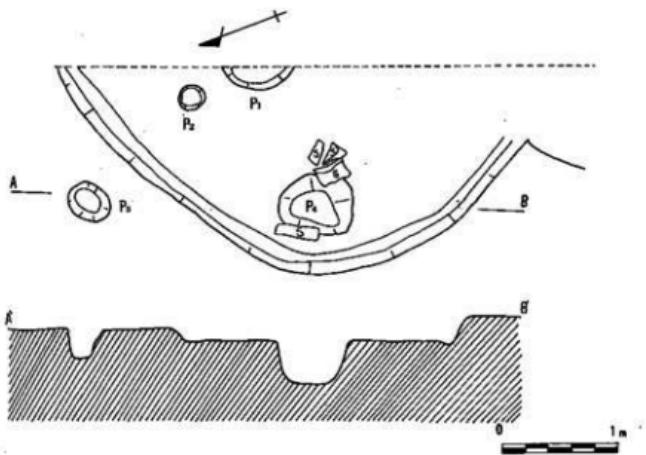
遺物は加曾利E式の土器片が相当量出土した。（小池政美）



第1図 遺構配置図



第2図 第1号住居址、第2号土坑実測図

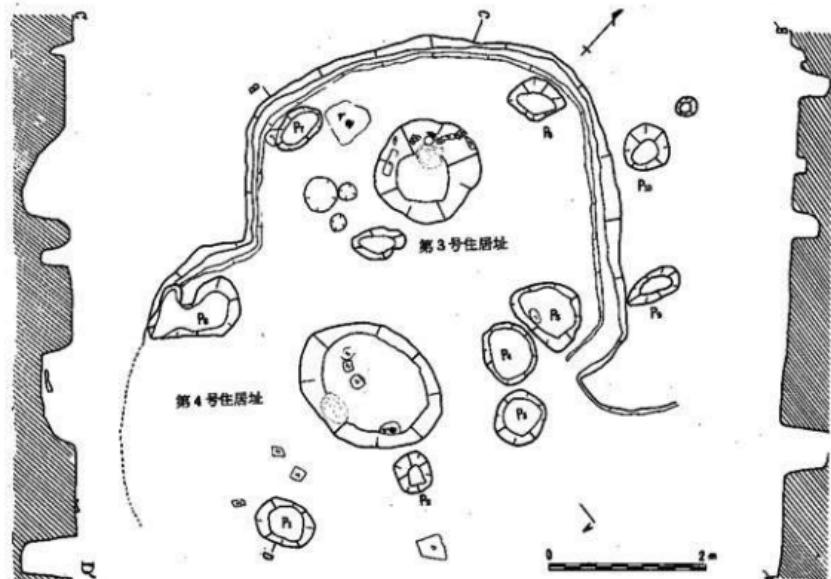


第3図 第2号住居址実測図

第3号住居址（第4図、図版6）

第2号住居址の南西に発見され、表土面から50cm位下のローム層を20cm前後平均に掘り込んだ竪穴住居址で、円形になると考えられる住居址プランであり、南側は第4号住居址に切られている。床面は極めて良好な硬さを呈し、ところどころにわずかな凹凸があるが、全般的には水平床に含まれる。壁は一般的に低いが、垂直に近く、割合にしっかりしている。

周溝は北側から南側にわたって存在している。構築当時すなわち第4号住居址に切られる以前は南側にも周溝は存在していたのであろう。周溝の幅は5cm～30cm、深さは5cm～20cm程度であるがと思われる遺構は中央よりやや北寄りに位置し、南北1m30cm、東西1m25cm程の円形状のすりばち状の黒土の落ち込みがあり、中より多量の焼土と炭化物が出土した。黒土を取り除き、掘り下げていくと、西から北に壁面に密着して大小さまざまな石が残存していた。前述した諸条件



第4図 第3号住居址 第4号住居址実測図

を考慮してみると、これらの石は炉縁石の一部と思われる。炉としてはこのような土塗状のものは考えられない。炉を構築した後に土塗状の遺構を掘る時に、これらの石がずり落ちて現在のような状態になったと思われる。柱穴はP₁, P₂, P₃, P₄の4本と思われる。

出土遺物は炉と思われるところより加曾利E式の深鉢、西壁に近いところより渦巻文の甕がつぶれた状態で出土した。遺物より本址は繩文中期後葉の住居址であると断定可能と思われる。

第4号住居址（第4図、図版6）

住居址の位置は第1号住居址の北側である。表層下50cm程でローム層になり、ローム層を20cm前後掘り込んだ竪穴住居址である。プランは円形であるとみられるが、北側は第3号住居址を切り、南側は第1号住居址に切られ、東側は用地外という条件が重って、結論的な考えはできない。

床面は堅硬で、壁は20cm程度で普通である。柱穴はP₁, P₂, P₃, P₄、第3号住居址と併用になると思われるP⁵もある。

炉と思われるものは住居址の全体が不明なので、はっきりした位置はわからないが、おおよそ中心辺だと考えられる。大きさは南北1m50cm、東西1m90cm程度である。中の状態あるいは、その他諸々の様相は第3号住居址と大差はないようと思われる。

遺物は加曾利E式の土器片が多量に出土した。時期は繩文中期後葉であり、重複関係より第3号住居址より新しいことは否定できない事実である。

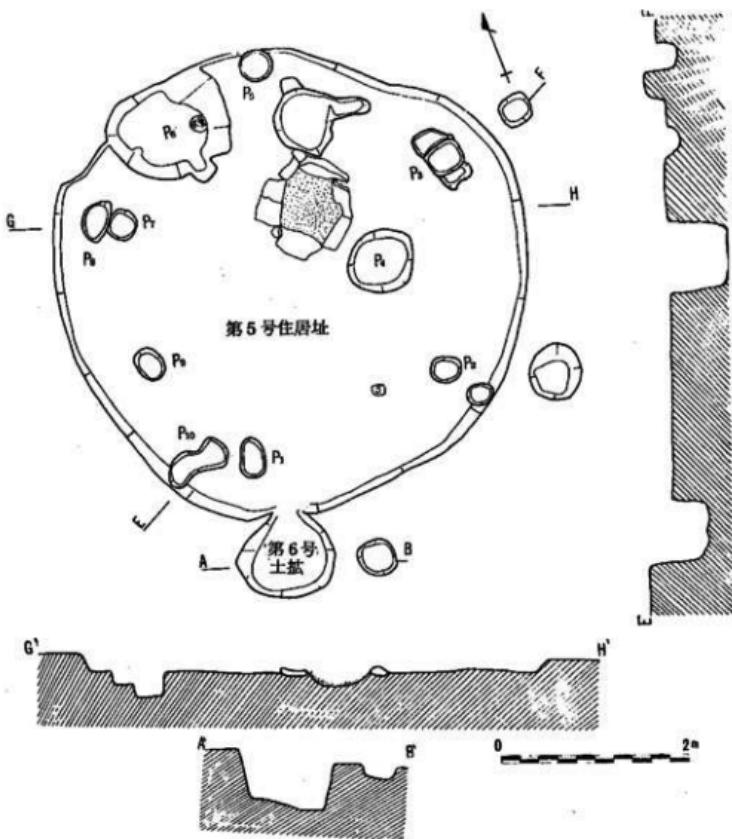
第5号住居址（第5図 図版7）

表土下35cmのローム層を掘り込んで構築した竪穴住居址で、その規模並びに平面プランは次の如くである。南北5m、東西5mの円形プランを呈している。壁は全周し、南から北への傾斜面により、南壁は高く、北壁は低くなっている。前者は20cm、後者は10cmを測定できる。壁外施設としては第6号土塗がある。如何なる故に住居址と別個に考えたかと申しますと、出土遺物に大きな相違点がみられたためである。

床面はローム層の極めて堅硬な叩きで、わずかに凹凸がみられた。柱穴は6本ほど等間隔に配置されており、それはP₁, P₂, P₃, P₄, P₅, P₆である。P₄のように断面袋状の形態を呈し、炉の近く、あるいは形態より貯蔵穴と結論づけるのがもっとも妥当な考えのように思われる。

炉は中央より、やや北東の位置にあり、南北1m50cm、東西95cm程の規模を有する方型石囲炉である。炉縁石はホルンヘルス、変成岩、花崗岩、砂岩などで、特に花崗岩は岩石の性質上状を受けるという状態を鑑定している。炉を詳細に観察をしてみると、すりばり状にくぼみ、焼土の堆積が厚く、鮮明な色を呈していた。炉縁石は大きな石と大きな石の空間部に拳大程の石をつめて頑強にしてあった。

遺物は加曾利E式の土器片が多数出土したが、本址の時代決定となりうるものはP₆より出土した底部穿孔の伏甕の土器である。これは加曾利EⅡ式に位置づけできると思われる。したがって、本址も同時期に位置づけできよう。



第5図 第5号住居址・第6号土塗実測図

第6号住居址（第6図、図版8）

調査地区の最北端に発見された住居址である。表層下50cm位下ったローム層面を掘り込んだ竪穴住居址で、その規模は北側は水路により、西側は第7号土塗によって、それぞれ破壊されている。現存している大きさや、その形態からして、構築当時は4m~50cm~5m前後で、円形プランを呈していたと思われる。

壁はわずかに内傾気味であり、高さは基盤が南東から北西への傾斜により、南東は高く、北西は現状では不可能である。南東は現測45cmを示している。北西の実数は不明であるが、前述した壁高よりも低いことは推察せられる。

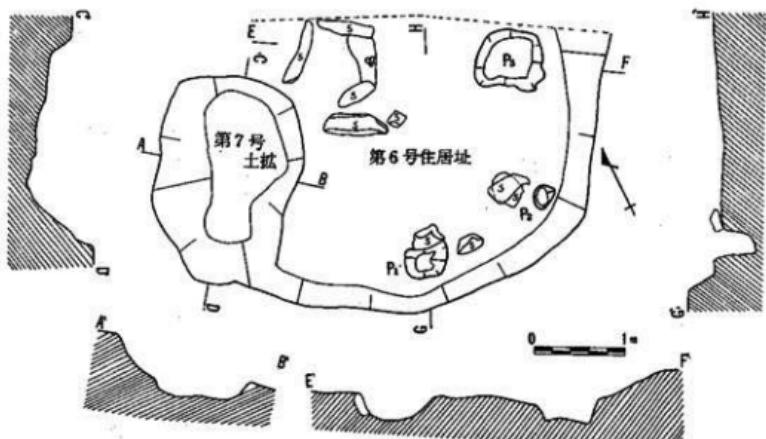
床面はローム層の極めて良好な叩きで、部分的にわずかな凹凸がある。

柱穴は南から東側、壁に沿って3本確認された。これから想像するに完掘すれば6本検出される見通しが強いと思われる。

南東の隅の壁から40cm位離れた位置にホルンヘルスの平板状の自然石を2個クロス状に重ね、その下に正位の埋甕が発見された。

炉は南北90cm、東西90cm程の方型石囲炉である。炉様石に使用されていた花崗岩は火を受けてボロボロ状態であった。炉底には焼土や木炭の堆積物が割合少なかった。中央部は内傾気味でたらい状に落ち込み、深さは床面より40cm程に及ぶ。炉様に長梢円形状の黒い落ち込みがくっきりとみられ、石が抜き取られたのを裏付けできた。

遺物は小破片をも含めると相当量の土器が出土したが、すべて加曾利E式のものである。



第6図 第6号住居址・第7号土塄実測図

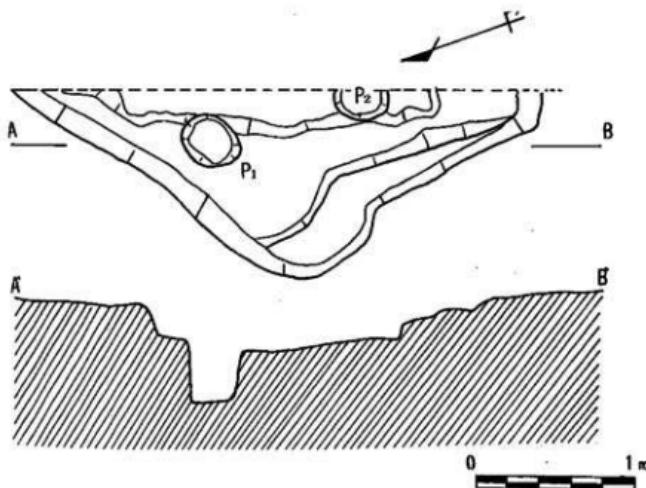
第7号住居址（第7図、図版9）

表層下40cm位のローム面を掘り込んだ竪穴住居址である。その規模は南北3m25cm、東西は用地外の為に不明。したがって当然プランも記述不可能である。

壁高は20cm程を計え、かなりの傾斜で内傾し、壁面には著しい凹凸がある。床面は極めてかたいローム層の叩きとなっており、壁面同様凹凸がはげしい。柱穴は完掘がなされないから、本数は不明であるが、現時点ではP₁、P₂と2本確認された。

遺物は覆土内より加曾利E式の土器片が出土、よって本址は縄文中期後葉と位置づけが可能となる。

（小池政美）



第7図 第7号住居址実測図

第2節 土 振

第1号土括(第8図、図版12)

発掘地区の最南端に位置し、その形状は南北1m15cm、東西1m、深さ15~20cmの不整橢円形を呈し、ローム層を掘り込んでいる。覆土は褐色土であった。壁はわずかに内傾し、その床面はでこぼこで、軟弱気味であった。

遺物は西壁近くに加賀利E式の古い土器が一括してつぶれた状態で出土した。

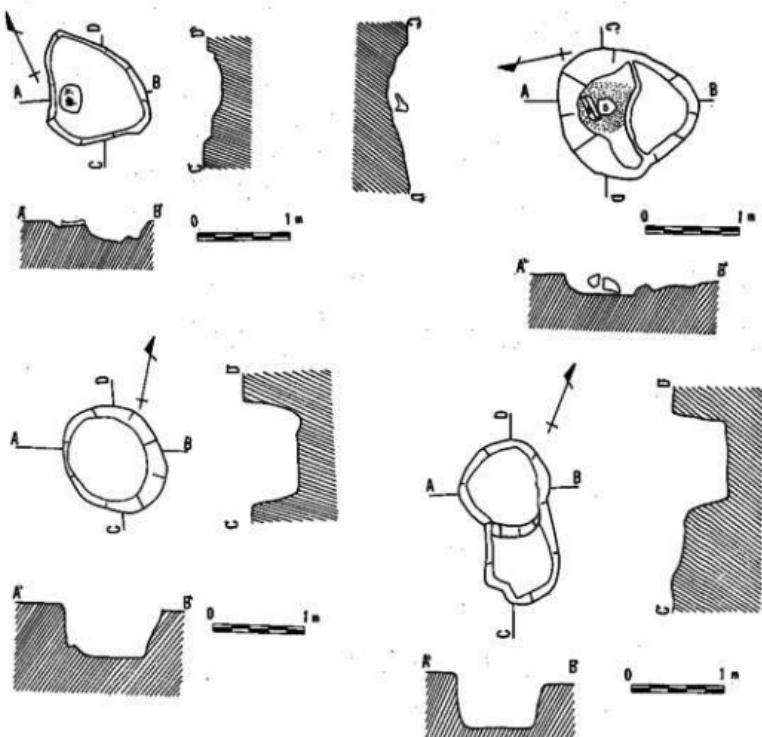
第2号土括(第2図、図版13)

第1号住居址の南側に位置し、南北1m5cm、東西1m10cmの円形を呈する土括と、東西に底辺80cm、南北に高さ1m10cm程の規模で三角形状を呈する土括、それらの二つの土括が組み合って第2号土括を構成している。

本土括はローム層を掘り込んでおり、覆土は黒色土であった。壁は内傾気味であり、床面は大体平坦となっていた。

切り込み面からの深さは円形の土括では25cm、三角形状の土括では15cm程を示しており、断面図によると段がついているような形になる。

遺物は加賀利E式土器片が出土した。



第8図土塹実測図 (左上第1号・右上第3号)
(左下第4号・右下第5号)

第3号土塹(第8図、図版14)

第3号住居址の北壁に近いところに位置した土塹である。規模は南北1m50cm、東西1m35cm程度であり、そのプランは橢円形を呈している。壁面は内傾気味であって、その深さは10~20cmである。床面には叩きあらしき状態は認められず、壁面、床面ともに凹凸がきわめて顕著であった。

北壁に近いところに人頭大程の硬砂岩が床面よりわずかに浮いて2個検出された。本来附近一帯には硬砂岩は存在していない。したがって石器に使用するために天竜川、または三峰川より運んできた可能性が強いように思われる。

遺物はいずれも破片であるが加曾利E式土器が出土した。

第4号土塹(第8図、図版15)

表土層面より35cm程下ったローム層面を掘り込んだ土塹である。平面プランは円形で、規模は南北1m15cm、東西1m5cmを測定できる。壁は内傾気味、わずかであるが断面袋状を呈してい

第Ⅱ章 遺物

第1節 土器

土器の説明は表を作製し、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を付記しておくことにする。

胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかな基準によったものではなく、筆者の主觀によるものである。

図版	番号	胎土	保存状態	色調	厚さ(mm)	文様の特徴	備考
25	1	多量の雲母	良好	赤褐色	7	土師器	第1号住居址
"	2	多量の長石	"	白灰色	4	須恵器	"
"	3	"	普通	赤褐色	10	沈線	第2号住居址
"	4	"	"	"	7	沈線、渦巻	"
"	5	多量の雲母	"	黄褐色	10	沈線	"
"	6	"	"	"	"	沈線	"
"	7	少量の雲母	"	黒褐色	8	沈線、刺突文	"
"	8	多量の長石	"	黄褐色	6	沈線、渦巻文	"
"	9	少量の雲母	"	赤褐色	7	沈線	"
"	10	多量の雲母	"	黒褐色	8	渦巻、繩文、懸垂文	第3号住居址
"	11	"	良好	茶褐色	8	刺突文	"
"	12	少量の雲母	"	赤褐色	13	隆唇、刺突文	"
"	13	多量の長石	普通	"	7	渦巻、沈線	"

第1表 出土土器の形状一覧表（その1）

図版	番号	胎土	保存状態	色調	厚さ(mm)	文様の特徴	備考
26	1	多量の長石	普通	茶褐色	11	隆線	第4号住居址
"	2	少量の雲母	"	"	8	"	"
"	3	多量の雲母	"	"	8	繩文、懸垂文	"
"	4	少量の雲母	良好	黒褐色	9	"	"
"	5	"	"	"	6	沈線	"
"	6	"	普通	茶褐色	7	沈線、刺突文	"
"	7	"	"	赤褐色	7	無文	"
"	8	多量の雲母	不良	黒褐色	8	繩文、沈線	"
"	9	"	"	黄褐色	6	堀文	"
"	10	"	普通	赤褐色	5	沈線、刺突文	"
"	11	少量の長石	良好	黒褐色	9	磨消繩文	"
"	12	多量の雲母	普通	茶褐色	4	"	"
"	13	"	"	"	6	"	"
"	14	"	"	黒褐色	8	"	"

第2表 出土土器の形状一覧表（その2）

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
27	1	多量の雲母	普通	茶褐色	8	縦文, 沈線, 爪彫文, S字状文	第5号住居址
"	2	少量の長石	"	"	9	渦巻文	"
"	3	多量の長石	"	黄褐色	7	縦文, 懸垂文, 緋杉文	"
"	4	多量の雲母	良 好	赤褐色	"	縦文, 沈線, 隆線, 刺突文	"
"	5	"	"	茶褐色	9	縦文, 渦巻文	"
"	6	"	"	"	8	"	"
"	7	"	"	白褐色	"	渦巻文	"
"	8	少量の長石	"	茶褐色	8	縦文, 景巻文	"
"	9	多量の雲母	普通	茶褐色	6	沈 線	"
"	10	"	"	"	7	"	"
"	11	"	"	"	6	隆 線	"
"	12	少量の長石	良 好	"	7	沈 線	"
"	13	多量の長石	普通	黄褐色	10	"	"

第3表 出土土器の形状一覧表（その3）

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
28	1	少量の長石	普通	黒褐色	7	縦文, 沈線, S字状文	第6号住居址
"	2	"	"	茶褐色	9	沈 線	"
"	3	多量の長石	"	黄褐色	7	懸垂文	"
"	4	"	良 好	茶褐色	7	隆線, 渦巻文	"
"	5	"	普通	黒褐色	9	"	"
"	6	"	"	茶褐色	8	隆 線	"
"	7	少量の雲母	"	赤褐色	9	"	第1号土塗
"	8	"	"	"	10	"	"
"	9	"	"	"	7	"	"

第4表 出土土器の形状一覧表（その4）

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
29	1	多量の雲母	普通	黒褐色	7	縦文, 懸垂文	第2号土塗
"	2	"	"	"	6	懸垂文	"
"	3	"	不 良	黄褐色	5	縦文, 沈線	"
"	4	少量の長石	良 好	"	10	隆線, 沈線	第3号土塗
"	5	"	普通	茶褐色	8	懸垂文	"
"	6	"	"	黄褐色	8	"	"
"	7	多量の雲母	良 好	茶褐色	8	縦文, 刺突文	"
"	8	多量の長石	普通	黒褐色	9	縦 文	第4号土塗
"	9	多量の雲母	"	黒褐色	6	沈線, 刺突文	"
"	10	少量の雲母	良 好	赤褐色	10	隆 線	第5号土塗
"	11	多量の雲母	"	黒褐色	7	隆線, 縦文	"
"	12	"	普通	"	5	沈 線	"
"	13	"	"	"	8	隆線, 縦文, 懸垂文	"
"	14	多量の長石	"	赤褐色	11	沈線, 懸垂文	"

第5表 出土土器の形状一覧表（その5）

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
30	1	多量の雲母	普 通	茶褐色	1.0	連続爪形文，沈線	第6号土 坂
"	2	"	"	"	1.2	"	"
"	3	少量の雲母	"	赤褐色	1.1	"	"
"	4	多量の雲母	"	黒褐色	8	"	"
"	5	"	"	"	1.0	"	"
"	6	"	良 好	茶褐色	1.3	沈 線	"
"	7	少量の長石	"	白灰色	7	"	第7号土 坂
"	8	"	"	"	5	"	"
"	9	少量の雲母	"	"	7	変形工字文	"
"	10	"	"	黒褐色	8	沈 線	"
"	11	"	普 通	"	6	隆線，沈線	第7号住居址
"	12	多量の雲母	"	"	8	繩文，沈線	"
"	13	少量の長石	"	赤褐色	1.0	繩 文	"
"	14	少量の雲母	"	白灰色	7	磨消繩文	"
"	15	多量の雲母	"	黒褐色	"	沈 線	"

第6表 出土土器の形状一覧表（その6）

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
31	1	多量の雲母	普 通	黒褐色	9	沈 線	グリット
"	2	"	"	茶褐色	1.3	"	"
"	3	少量の長石	良 好	黒褐色	1.3	隆帶，爪形文	"
"	4	"	"	"	8	沈線，刺突文	"
"	5	"	普 通	茶褐色	1.0	"	"
"	6	"	良 好	"	8	"	"
"	7	"	"	黒褐色	1.0	沈 線	"
"	8	"	"	"	8	"	"
"	9	"	"	"	1.0	"	"
"	10	少量の雲母	普 通	茶褐色	8	沈線，刺突文	"
"	11	"	"	"	1.0	"	"
"	12	"	"	黒褐色	1.0	"	"
"	13	"	"	"	6	粘土紐，沈線，刺突文	"

第7表 出土土器の形状一覧表（その7）

第2節 陶 器

陶器の説明は表を作製し、一見のものと理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を付記しておくことにする。

本来ならば時代を考える必要があるが、専門家による鑑定を必要とするので、今回は省略させてもらひ、後の機会に発表したいと思う。
（小池政美）

図版	番号	器形	色調	厚さ(mm)	備考
32	1	甕 底部	灰白色	7	柱穴群
2	2	甕 底部	"	6	"
3	3	"	"	8	"
4	4	青磁碗	薄緑色	6	"
5	5	甕	灰白色	10	"
6	6	"	黑灰色	6	"
7	7	大 甕	茶褐色	12	"
8	8	青磁碗	薄緑色	4	"
9	9	甕	白色	"	"
10	10	鉄釉碗	茶色	"	"

第8表 出土陶器の形状一覧表(その6)

第3節 石器

石器の説明は表を用いることとする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石質、備考である。
(小池政美)

図版	番号	名称	器形	石質	備考
33	1	打製石斧	短冊形	硬砂岩	第4号住居址
2	2	"	"	"	"
3	3	"	"	綠泥岩	"
4	4	"	"	"	"
5	5	石 鋸	"	硬砂岩	"
6	6	磨 石	"	"	"
7	7	打製石斧	撥 形	"	第5号住居址
8	8	"	短冊形	"	"
9	9	"	"	"	"
10	10	磨製石斧	定角形	綠泥岩	"
11	11	"	"	"	"
12	12	"	"	蛇紋岩	"

第9表 出土石器の形状一覧表(その1)

図版	番号	名称	器形	石質	備考
34	1	打製石斧	短冊形	硬砂岩	第6号住居址
2	2	"	"	綠泥岩	"
3	3	"	"	硬砂岩	"
4	4	"	"	綠泥岩	"
5	5	磨製石斧	乳棒状	"	"
6	6	"	"	"	"
7	7	磨 石	"	硬砂岩	"
8	8	"	"	"	"
9	9	打製石斧	撥 形	綠泥岩	第7号住居址
10	10	磨製石斧	定角形	蛇紋岩	"
11	11	"	"	"	"

第10表 出土石器の形状一覧表(その2)

第Ⅳ章　まとめ

常輪寺下遺跡は古くから知られた遺跡であった。遺跡に指定された場所は現在、全面にわたって水田になっている為に、表面採集実施は不可能であった。そこで今回の発掘調査にあたっては山本部落の古者の話を参考にして実施に踏み切った。その話によれば『遺跡地附近は西から東の傾斜地を水田にしたために、一枚の水田のうち、西側は取土、東側は埋土になっている。開田は明治時代に行なわれ、全て人間の手によって造成されたのであるから、遺跡の破壊は少ないのではないか』

大規模農道路線内に該当する場所、おうよそ $800m^2$ と限定された発掘面積であったが、かなりの成果を得ることができた。

縄文中期の住居址 6、奈良時代の住居址 1、縄文中期の土塙 6、縄文晚期の土塙 1、柱穴群 1 などの遺構とそれに伴う遺物相当量であった。

第 2 号、第 7 号住居址は大部分が用地外にはみだした状態で、その正確なる様相は把握できなかった。出土した遺物より縄文中期後葉加曾利 E 式の住居址であると判明したにすぎなかった。

第 3 号、第 4 号住居址は切り合い關係で発見されたので、完掘したにもかかわらず、その正確なる実数は明確に掌握できずに終ってしまった。ただ明らかなる点は第 3 号住居址を第 4 号住居址が切り、第 4 号住居址を第 1 号住居址が切っていることの二点である。炉の形態は類似しているが、加曾利 E 期としては珍らしい。出土遺物は完型品が多く、時代決定は割合に安易であり、それによると、両住居址は一編年違うに留まる。

第 5 号住居址は発見された住居址中、完全な姿が検出された唯一のものであった。住居址、炉の形態は加曾利 E 期としては、相違点はないが、ただ北東の隅に底部穿孔の伏甕が出土した点は今後の研究に好資料を提供してくれたと思う。

第 6 号住居址では南東の壁に近いところから正位の埋甕が出土した。埋甕の上に二枚の平板状の蓋石が置いてあり、資料性が高いものといえよう。

第 1 号住居址は奈良時代の住居址で遺物量も少なく、須恵器の杯と土師器片が出土したのみにとどまった。カマドはおそらく住居址の東側、用地外にあると思われる。

第 1 ～ 第 5 号土塙は縄文中期後葉、第 6 号土塙は縄文中期初頭、形態や深さ、様相は一般的にみられるのと大差はなかった。第 7 号土塙は編年で言うと、大洞 C₂、大洞 A に属しており、上伊那においてこの時期の遺構は極めてまれである。

柱穴群は発掘地の最南端に発見された遺構である。面積が狭い為にその配列状態は不明であるが、柱穴内の覆土より何時代かにわたっていると思われる。柱穴の中より多量の鐵くそ、吹子が出土し、タカラ製鉄の存在性を有効にさせる好資料となりうる。遺物は中世陶器（分類するならば常滑、中津川、青磁）が出土した。これらの使用人は相當なる高貴な方と思われ、場所的にみて、小出城、あるいは常輪寺、犬房丸との関係に結びつくものと思われる。

（小池政美）

参考文献

註1・大場磐雄他「信濃考古学綜覧」信濃資料刊行会 昭和31年

註2・加曾利貝冢 昭和41年

註3・上伊那誌刊行会「上伊那誌」 昭和40年

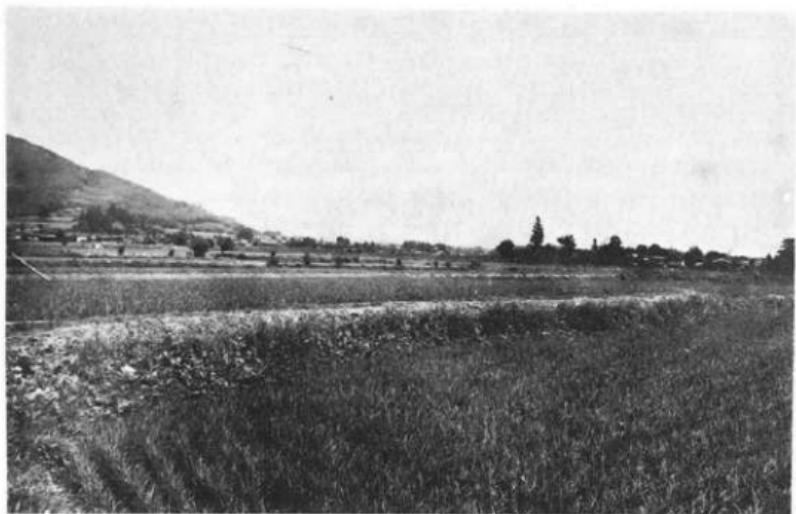
註4・鳥居龍藏「先史及び原始時代の上伊那」上伊那教育会 大正13年

註5・長野県教育委員会日本道路公団名古屋支社「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」昭和46年，昭和47年，昭和48年

註6・茅野市教育委員会「茅野和田遺跡」 昭和45年

註7・山ノ内教育委員会「佐野」 昭和42年

註8・伊那市教育委員会「伊那市寺院誌」 昭和48年



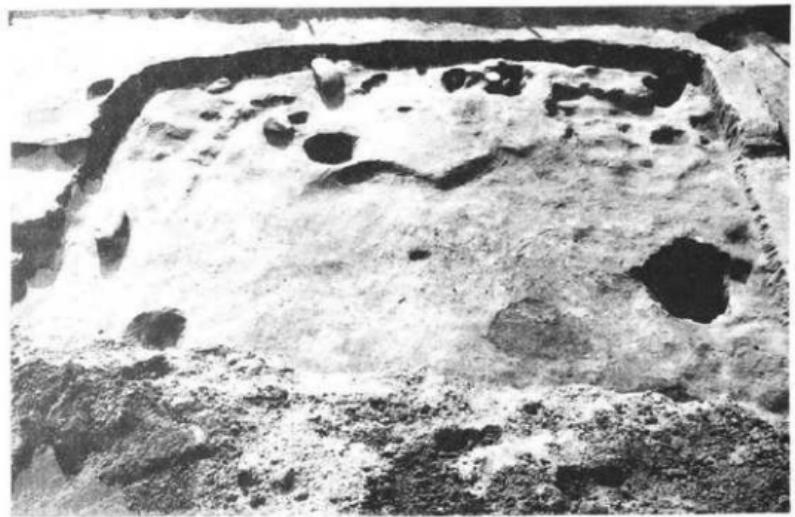
図版1 遺跡遠景（南側より望む）



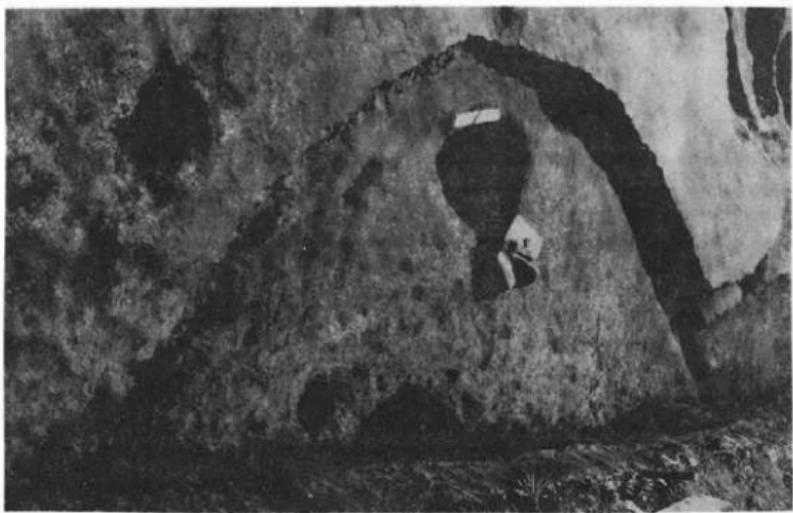
図版2 遺跡近景（西側より望む）



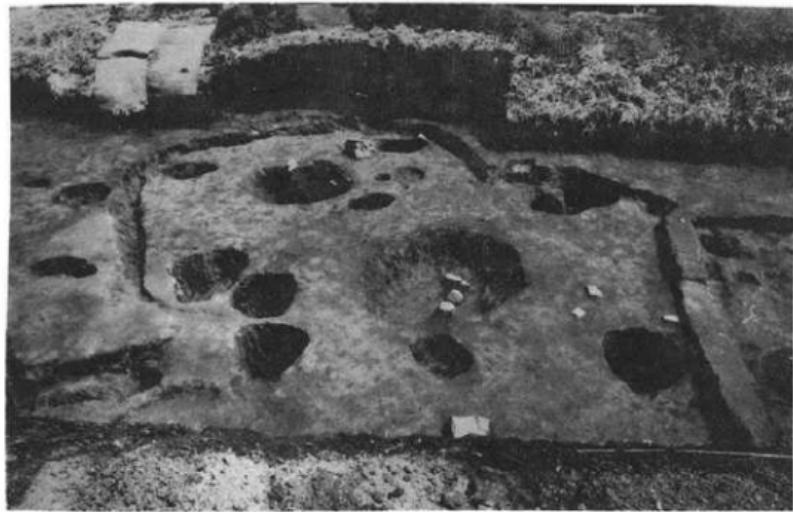
图版3 遗構全景



图版4 第1号住居址



図版 5 第 2 号住居址



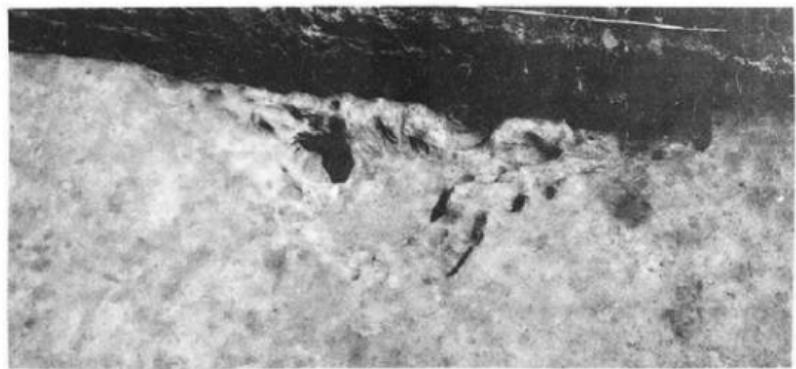
図版 6 第 3・4 号住居址



图版7 第5号住居址



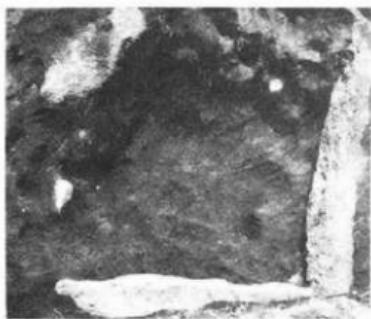
图版8 第6号住居址 第7号土坛



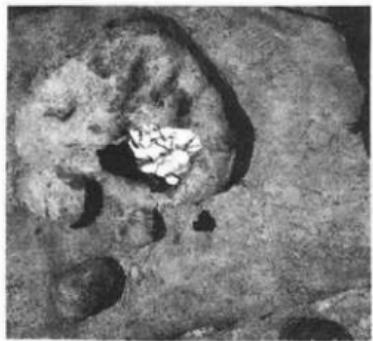
图版 9 第 7 号住居址



图版 10 第 5 号住居址炉址



图版 11 第 6 号住居址炉址



图版 12 第 1 号土坛



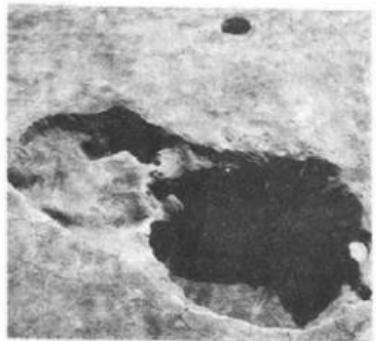
图版 13 第 2 号土坛



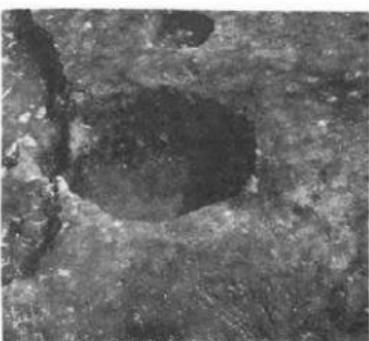
图版 14 第 3 号土块



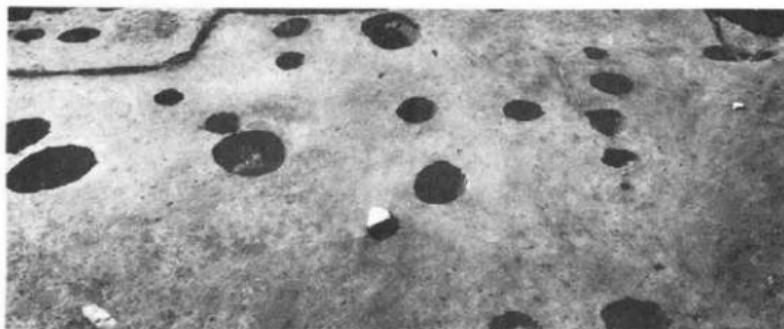
图版 15 第 4 号土块



图版 16 第 5 号土块



图版 17 第 6 号土块



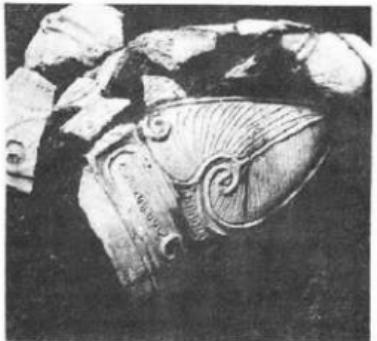
图版 18 柱穴群



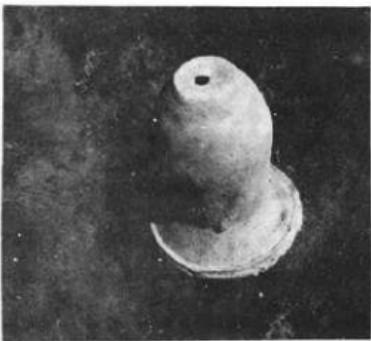
图版 19 须惠器出土状况(第1号住居址)



图版 20 土器出土状况 (第3号住居址)



图版 21 土器出土状况 (第3号住居址)



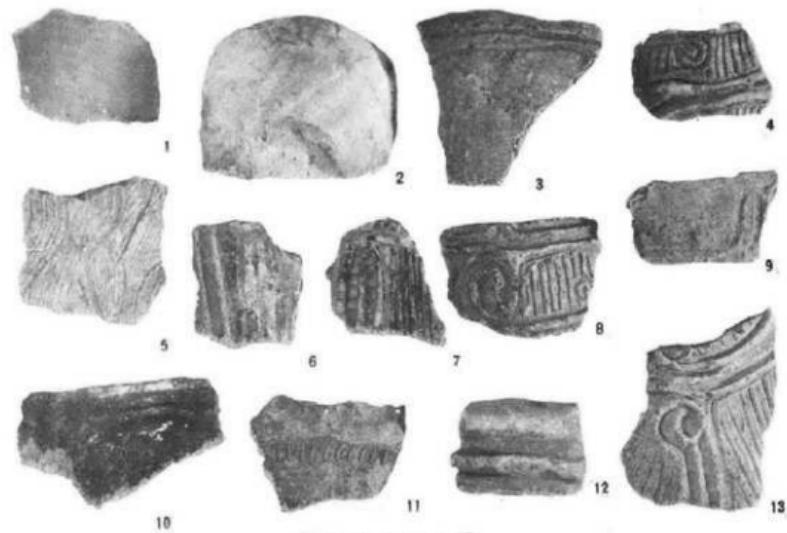
图版 22 土器出土状况 (第5号住居址)



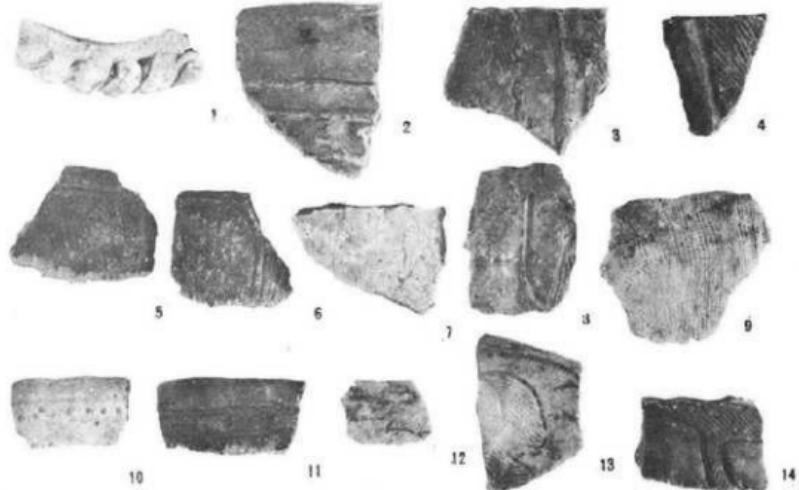
图版 23 土器出土状况 (第6号住居址)



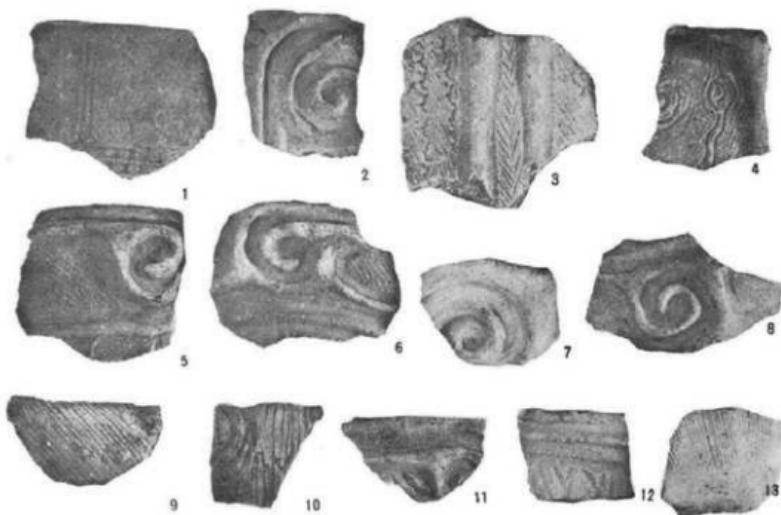
图版 24 土器出土状况 (第7号土坑)



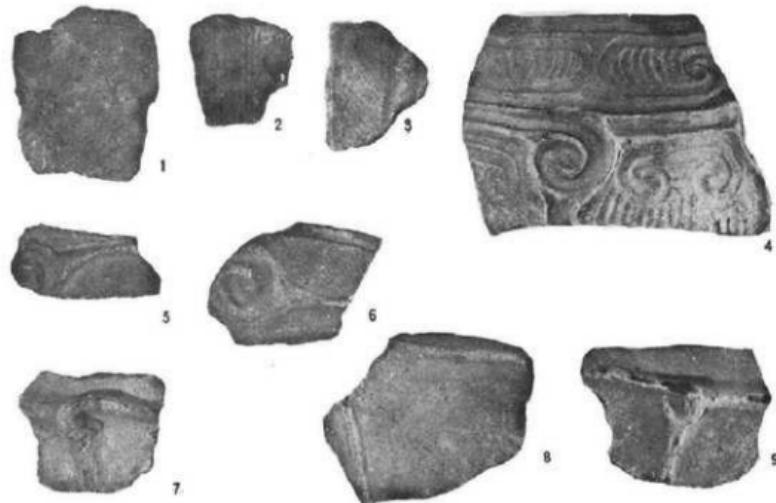
圖版 25 出土土器



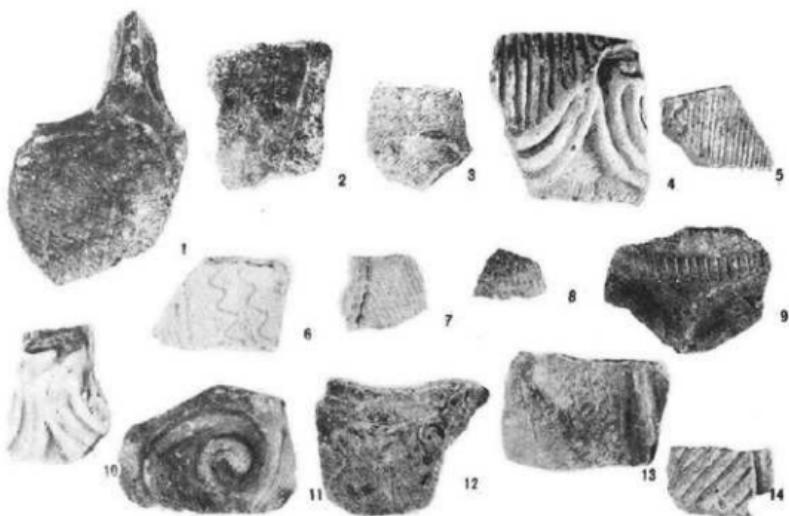
圖版 26 出土土器



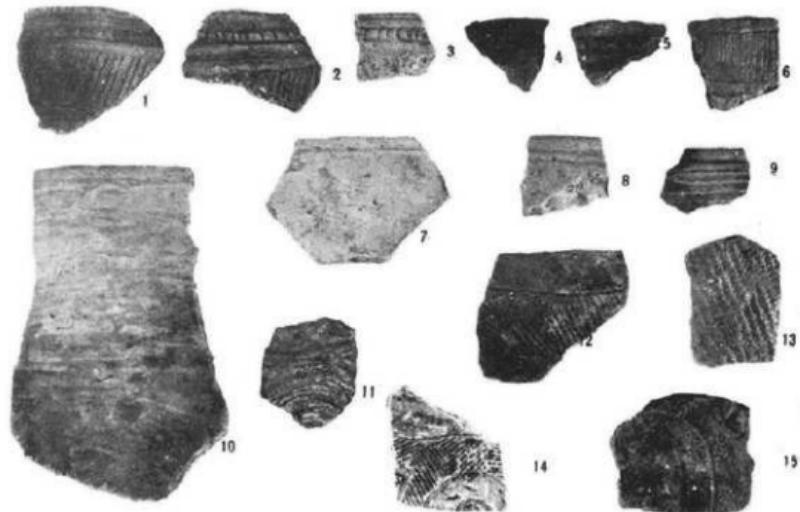
図版27 出土土器



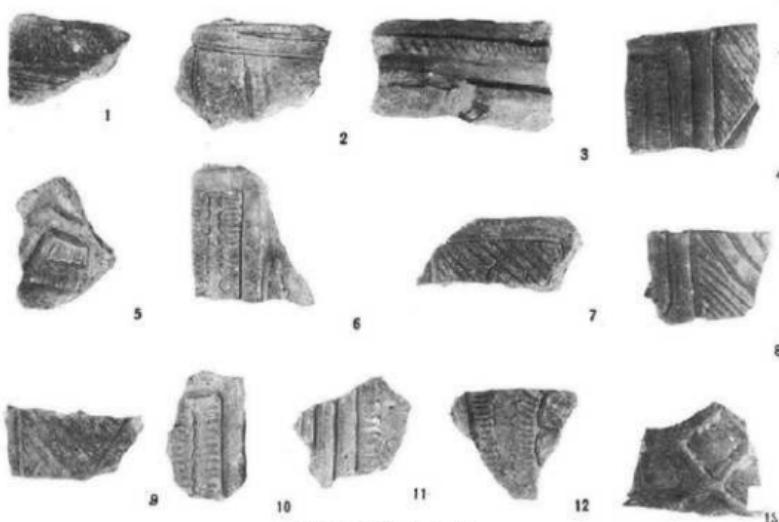
図版28 出土土器



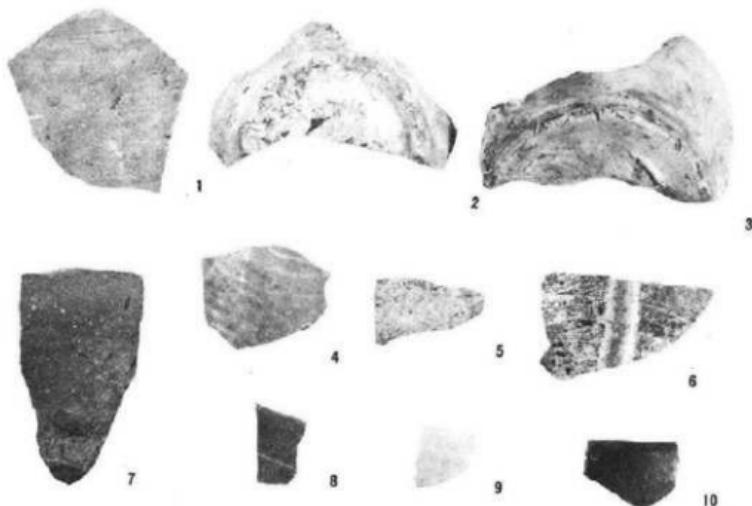
図版29 出土土器



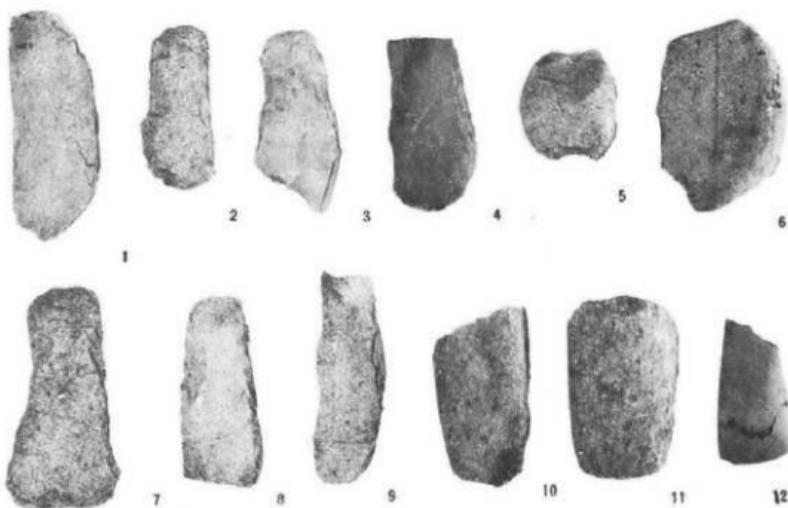
図版30 出土土器



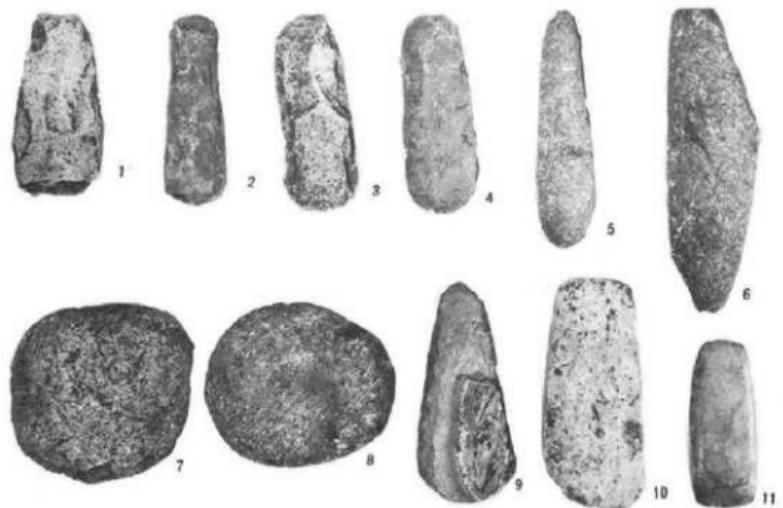
图版 31 出土土器



图版 32 出土陶器



図版33 出土石器



図版34 出土石器

北条・常輪寺下遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和49年3月30日 印刷

昭和49年3月31日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県伊那市美すず上大島
みすず創美社

